

## 2 海外都市行政視察 総括

---

団長 田坂 信一

平成26年8月28日、平成26年度松山市議会議員海外都市行政視察団を結成し、同日開催された第1回打ち合わせ会において、団長、副団長の選任を行い、随員職員を決定した。

また、その打ち合わせ会において、平成26年度の各派代表者会議の申し合わせ事項に基づき、経費の縮減、成果報告の充実について確認の上、視察先、視察内容等について慎重に審議を行った。

なお、視察先については、先の地域主権検討特別委員会において、海外視察の在り方について論議がなされ、その中で「次の任期からは、姉妹都市交流を中心に実施し、その近隣の都市までです。」と決定されているので、今回の視察先は、それに基づき本市の姉妹都市であるドイツ・フライブルク市との友好交流を図るとともに他の視察先を選定することとした。

また、打ち合わせを重ね視察内容は、「スポーツ振興」、「環境教育」、「議会制度」、「都市交通政策」、「農業政策」、「高齢福祉」、「子育て支援」を選定した。

その後、9月8日には市内旅行者7社を対象に説明会を開催し、あらかじめ提示していた視察先や旅程等に関する条件を基に、各社から企画書を提出してもらい、10月3日に開催した第4回目の打ち合わせ会で、各社の企画書を審査した結果、名鉄観光サービス（株）の企画案を採用することとなった。10月31日の第5回打ち合わせ会では、名鉄観光サービス（株）から、日程等についての詳細な説明を受けるとともに、テーマごとの担当者を決定した。

その後、各テーマごとに関連した松山市の現状等について勉強会を開催し、担当課から説明を受け、視察先の現状を把握する際の参考とするとともに、今後の市政に反映するための視点についての理解を深めた。

そして、12月11日の12月定例会開会初日、10名の議員団の派遣承認

を受けた。

なお、派遣承認を受けていた池本俊英議員については、平成27年1月14日に体調不良により辞退したい旨の申し出があり、議長において承認され、結果9名の議員が視察を行うこととなった。

平成27年1月20日の出発日、午後3時10分から、松山空港待合室において清水議長、雲峰副議長、大濱理財部長をはじめ、議会事務局や財政課の職員出席のもと、出発式を挙行了した。

式では、清水議長から「寒い時期なので、健康には十分留意いただき、視察目的を達成し、それらの成果を市政に是非反映していただきたい。」との激励を受け、松山空港から伊丹空港を経て関西国際空港に移動し一泊。

翌21日の朝、ドイツ・フランクフルトへ向け空路、出発した。同日、現地時間午後3時10分（日本時間 午後11時10分）フランクフルト空港に到着。関西空港を出発してから、12時間半が経過。日本との時差はマイナス8時間。フランクフルトからバスで4時間程かけて午後8時前にフライブルクに到着。予想していたとはいえ、松山より寒く底冷えがする。

22日の朝、フライブルク市内の旧市街地の視察をする途中、昨年、姉妹都



(ウィルナット館長と俳句ポスト)

市提携25周年視察団訪問時、本市からフライブルク市に寄贈した俳句ポストが設置されている市立図書館を視察する。そこで、ウィルナット館長さんから俳句ポストの利用状況などについて、お話を伺った。

フライブルク俳句ポストへの投句数は、平成25年度は252句であったものが、今年度は6

92句と大幅に増えており、現在、松山市において、その中から姉妹都市提携

25周年にちなんで25句の優秀句を選定作業中のことである。俳句のまちに育ちながら未だに俳句が苦手な私には、フライブルク市民がこれほどまでに俳句に関心を持ち、多く投句されていることに大変、喜びを覚えた。

この俳句ポストは地元新聞で取り上げられるとともに、図書館のホームページには、俳句ポストのサイトが開設されているとのことで、積極的にフライブルク市民に松山の文化を紹介していただいている。日本文化に造詣の深い館長からも、期待以上に市民が利用しており、非常にうれしく思っていると伺いました。この俳句ポストを通じて、両市の文化の交流が図られるとともに松山をPRする絶好の機会になっているようである。

午前10時半過ぎ、フライブルク市にある南バーデン地域で最も大きな総合型スポーツクラブであるFT1844を視察。

フライブルクには、独自の練習場や集会施設などを構えた100を超えるスポーツクラブが各地域にあり、希望するスポーツがあれば、必ずそれにあつたクラブを見つけられるといわれるほどである。また、日本と違い学校での部活動が行われなため、子供から大人まで、何かのスポーツをやってみたい、楽しみたいと思う人は、こうした地域のスポーツクラブに行くことになる。

そのスポーツクラブの一つであるFT1844は、会員数6,500人を超え、オリンピック選手や数多くの優秀なスポーツ選手を輩出しているとともに、高齢者や障がいのある方なども含め、すべての人が健康づくりやスポーツを楽しめるようになっている。

広大なクラブの敷地には、競技場や大小さまざまな体育館、テニスコート、屋内プールなどが完備され、多くのスポーツの種目に応じた理想的な環境が整



(FT1844で説明を受ける視察団)

っており、また、スポーツ、運動に特化したスポーツ幼稚園や、国公認のスポ



部長から市議会制度について、詳細にご説明をいただく。

ブルガー氏は、松山に20回も訪問している大の親日家で、私自身もすでに5, 6回はお目にかかっている。

本市と比較し、フライブルク市議会制度の特徴として、議員の任期は5年で基本的にボランティアであり、議員活動とは別に職業をもっている。議会は3週間に1回程度開催され、夕刻に開かれているため市民が傍聴しやすくなっているとのことである。

また、松山でも近年、投票率の低下が問題になっているが、フライブルクにおける昨年6月の市議選は、本市よりやや高めの52.38%だった。

16歳から選挙権を有し、有権者1人に投票数は48票を有し、1人の立候補者に最大3票まで投票できることや、各党に投票することが可能なことなど、日本の選挙制度と比べ、複雑なシステムのように感じられたが、有権者への周知については、しっかりとできているというお話だった。



(ブルガー氏と視察団：議場にて)

午後6時過ぎ、フライブルク市表敬訪問とともに歓迎交流会に出席。

当初20～30名の方の出席と聞いていたが、副市長さん、4人の市議会議員さんを含め50名を超える多くの市民の方々がすでに会場にお越しにいただいていた。



(交流会でのシュトフリック副市長の挨拶)

冒頭、ゲルダ・シュトフリック副市長さんから松山市を訪問したことや、姉妹都市提携から26年、両市の交流が着実に進んでいることなど温かい歓迎のお言葉をいただ

き、大変恐縮した。

続いて、視察団を代表して、私からは謝意を述べた後、私自身が8年ぶりの3回目の訪問であること、平成元年、桜が満開の松山城で当時のベーム市長と中村時雄市長が姉妹都市提携の調印を交わした時のことや、この26年間、様々な分野で両市の活発な交流が進んでいることなどを交えて挨拶した。

その後、赤ワイン片手にリラックスした雰囲気でも和やかに懇談が始まる。

80歳を迎えた姉妹都市提携時のベーム前市長さんが、現在もお元気で自転車に乗って市内を走っておられることなどもお聞きした。

また、この交流会には、松山を訪問された方も多く参加されており、道後温泉、松山城の写真をお見せいただきながら、当時の話をお聞かせていただくなど、終始和やかな雰囲気での交流会であった。

引き続き午後7時30分から市内にある「赤熊亭」というフライブルクで一番歴史のある老舗のレストランで、歓迎の夕食会を開催していただいた。

初めてお目にかかるマーティン・ハーグ副市長さんと交流会に出席されていた4人の議員さん、ブルガーさんらを囲み懇談が始まった。

ハーグ副市長さんは、身長2メートルを超える大変背の高い方で、長身の渡部団員や上杉団員も小さく感じるほどだった。

歓迎夕食会では、今、フライブルク市民の間で賛否が分かれているサッカー場の建設問題や交通政策など、様々な問題について意見を交わした。副市長からは「まだ松山を訪問したことはないが、是非機会を見つけて訪問したい。」とおっしゃっていただき、温かな雰囲気の中、交流を深めた夕食会であった。

翌23日午前中は、フライブルク市内の駅や駐輪場などを視察した後、次の目的地であるストラスブールに向かい、昼前に到着。

フランスの最も東に位置し、ドイツと接するこのまちは、歴史の中で何度も所有をめぐり、フランスとドイツ領を行き来した。国が移り変わった戦争の歴史の反省から、ヨーロッパの平和はストラスブールからというイギリスのチャーチル元首相の提案で、同市には欧州評議会や欧州人権裁判所、欧州議会の本

会議場などの国際機関を有し、EUの象徴的な都市である。

ストラスブール市庁舎を訪ね、ブルノー・ジェンセン交通局長から世界でも進んでいるといわれる交通政策について詳細にご説明いただいた。

ストラスブールは、かつて交通政策の改革を公約に掲げ当選した市長が、超低床電車のトラムを世界に先駆けて導入するとともに、パークアンドライドシステムなどを実施し、今や世界で注目される都市政策の先進市となっている。

歴史的建造物や環境にも配慮したトラムは、導入時の1994年の4,200万人利用から、現在は1億2,000万人へと乗客数も大幅に増えており、導入に際し、反対が多かったトラムも今やパークアンドライドとともに市民の誇りであり、自慢のひとつになっている。



(景観にマッチしたデザインのトラム)

過去、観光の要所であるストラスブール大聖堂の前でさえ駐車スペースとなるなど、車であふれたまちがこうした交通政策により、市内中心部への車の流入が低減し、自転車専用道も整備され、中心市街地の活性化が図られる外、クリスマスの12月、1ヶ月だけで250万人もの観光客が訪れるといった経済面で

も大きな効果をもたらした。

本市でもコンパクトシティを活かすため、自転車共同利用システムやパークアンドライドを推進し、連結LRT（低床路面電車）、路面・郊外電車のシームレス化、空港延伸など公共交通の見直しに挑戦しようとしており、ストラスブールの交通政策は大いに参考となる視察であった。

24日は早朝ストラスブールからフランクフルトへバスで移動し、空路フィレンツェへ向い、午後2時に到着。

フィレンツェは、イタリア共和国の中心部にあり、市街の中心部は「フィレンツェ歴史地区」として、ユネスコの世界遺産に登録されているまちである。

午後3時、フィレンツェ市内にある「フィレンツェ障がい者スポーツセンター」を視察した。

土曜日にもかかわらず、フィレンツェ市役所のスタッフや指定管理の責任者、障がい者協会の会長さんが時間を割いて、スポーツセンターの取り組みや活動内容について詳細なご説明をいただいた。



(パラリンピック協会タッコーニさん外)

同センターは、身体に障がいを抱えた方々の健康づくりやスポーツを推進

するため1984年に設立され、卓球、陸上競技、フェンシングなど様々なスポーツを楽しむことができ、年々、利用者は増えているとのことである。

日本の障がい者スポーツでまず問題となるのは、活動場所の確保であるが、ヨーロッパにおいては、一般のスポーツ組織と対等な権利を認めており、障がい者スポーツ団体は、大半が一般施設を利用しているとのことであった。

事実、バリアフリー化された施設は、イタリアパラリンピック協会から認証プレートを受け、障がい者の方が使用できる旨、そのプレートを掲示していると伺った。

日本では、文部科学省が2015年度から、障がいに対する理解を深めるため、小中学校の授業にブラインドサッカーなど障がい者スポーツを取り入れる事業を始めるとのことである。

今回の視察では、車椅子に乗ったパラリンピック卓球競技のメダリストである障がい者協会の女性の会長さんと卓球経験者の若江団員が卓球を行い、障がい者と健常者が同じスポーツを通し、その楽しさを共有した。

2017年、本県にて開催される第17回全国障がい者スポーツ大会もあり、本市においても、障がいを持った方に対しスポーツに参画できる一層の環境整備を図る必要性を感じたところである。

25日の日曜日は、早朝から2時間30分余りをかけ、イタリア半島中西部

に位置するトスカーナ州のモンテプルチャーノへ移動、午前10時半頃に到着。

トスカーナ地方はイタリアでも有名なワイン産地で、ワイナリー、オリーブ農園、宿泊施設などを有する「アグリツーリズモ」を視察。

イタリアで生まれた「アグリツーリズモ」は、日本語では「農家民宿滞在」、「農村滞在型旅行」とも訳されている。



(トスカーナ地方の丘陵地帯)

温暖な気候で良質なブドウの産地であるトスカーナ州は、イタリア国内に21,000軒あるアグリツーリズモ施設の4分の1を占めており、アグリツーリズモが最も発展している地域である。

今回の視察先であるヴィラ・ノットラ農場では、ワインの製造過程や、オリーブ農園の剪定、宿泊施設等を現地視察の後、同農場責任者の方から詳細な説明をいただいた。

農業体験の他に、乗馬やサイクリング、テニス、プールなどのレクリエーションを体験できる施設もあるとお聞きした。

トスカーナ州においては、アグリツーリズモを推進することにより、農村地域の保全、活性化が図られ、その事例は、農業生産、加工、販売、観光等を一体化したアグリビジネスの成功例と言える。我が国において、農林漁業の6次産業化の推進が図られている中で有意義な視察であった。

本市では、風光明媚な瀬戸内海、その自然に恵まれた農水産物という地域資源に恵まれており、特に中島、興居島は、都会の人々がこうした環境の中、ゆっくりとした時間の流れの中で、心を癒すには絶好の場所ではないだろうか。

そうした意味からも本市では、中島、興居島でのお試し移住が可能となる居住施設として未利用の教員住宅の活用、また、「里島体験滞在型交流施設」が計画されているが、豊かな自然と生活を維持し、都会からの交流人口拡大を通じ、中島、興居島の活性化が望まれるところである。

アグリツーリズムの視察を終え、バスで移動し午後4時過ぎにローマに到着。  
イタリアは古代ローマ帝国の中心であり、15～16世紀にルネッサンス文化が栄え、世界中の文化遺産の40%がこの国にあると言われている。

ローマはイタリアの首都であると同時に、同国の政治・経済・文化の中心地であり、世界を代表する都市のひとつで、その美しさから「永遠の都」とも呼ばれている。

26日午前10時、ローマ市内にあるサンミケーレ老人ホームを視察。

このホームは1693年に孤児院としてローマ法王によって設立され、現在は市の援助を受けながら、主に老人ホームとして運営されている。

イタリアも我が国と同様に、少子高齢化の波が押し寄せており、日本より若干低いものの高齢化率の上昇が社会問題となっている。

1890年以來、公営の施設となっているが、運営については、自主性を尊重した運営となっている。

ローマ法王によって設立されただけあり、カトリック精神に基づく福祉の精神が根底にあるとお聞きした。



(サンミケーレ老人ホームにて)

ラテン系の方が多いせいか、皆さん陽気でお洒落な高齢者の方が多く、自慢の手作りの絵や工芸作品なども拝見させていただいた。

覚えてたのボンジョルノ(おはよう)、ピアチャーレ(お会いできてうれしい)とお声をかけると、明るい笑顔でボンジョルノと返してくれたことが印象的であった。

施設入所者は総じて明るく、生き生きと生活をされており、地域のボランティアの方々も深く関わり、明るい環境の中で、また、個人の性格や趣向に応じた対応がこの施設でなされていると感じた。

イタリアでは、伝統的な家族主義に支えられたサポートが薄れつつあり、施設介護への需要が増えているとともに、この施設では重度の方も入所されるようになり、施設職員の負担は過重となってきたとのことであった。イタリアでは、現場で働く人材の確保を目的に、労働力としての移民対策などにも取り組み始めたと聞くが、施設介護ニーズの増加など、社会状況の変化に伴い数多くの課題が残っており、今後の対策が急がれるのは我が国と同様であると感じた。

昼食の後、午後2時前に最後の視察先になるモンテッソーリ幼稚園を視察。

モンテッソーリ教育とは、子どもたちの自発的な活動を重視し、決して先生は束縛しない、与えられたカリキュラムによって何かをするのではなく、好きな時間にそれぞれが絵画や音楽をするとのこと。

自立心があり、責任感や思いやりのある人間を育てることを目的にしているモンテッソーリ教育であるが、一つの大きな特徴は、社会性・協調性を促すため、



(チェヴェニーニ園長からの説明)

3歳の幅を持つ異年齢混合クラス編成を行っていることである。

日本と同様にイタリアでも家庭の教育レベルが低下しているとのことであり、モンテッソーリ教育は、しつけやマナーは家庭だけに任せるのではなく、年齢の区分でなく縦割りのグループでの教育により「年長者が辛抱しながら

ら年少者の面倒を見るということ覚え、年少者もその年長者を見て、そのようになろうとし、そこで自然にしつけ等が生まれる。」とのことであった

異年齢の子ども同士が生活しながら「しつけ」や「マナー」を学んでいくということについては、大変興味深く感じたところであり、子どもたちを取り巻く社会の変化に応じた幼児教育が必要であると思ったところである。

27日には、ローマ空港を午前9時55分に出発、午前11時55分、ドイツのフランクフルト空港に到着。

フランクフルト空港を午後1時45分に出発し、約12時間をかけ日本時間午前9時5分、ようやく関西国際空港に到着した。

関西国際空港より伊丹空港へバスで向かい、午前11時55分に伊丹空港を出発し、午後0時50分松山空港に到着後、清水議長を初め議会事務局職員のお出迎えをいただき、ロビーの一角で解団式を行い、解散した。

なお、今回の視察団の各調査研究テーマの詳細な報告については、担当の団員が別途報告書を作成しているので、そちらに譲ることにする。

### 【おわりに】

幸いなことに視察期間を通して、一度も傘をさすこともなく天候に恵まれ、団員一同元気に事故もなく全行程を終えた。また、団員一同、海外視察の目的をしっかりと自覚し、事前の勉強会を重ね、綿密な準備の上、各テーマに沿って、熱心に視察を行うことができた。

松山に帰った翌日、議会事務局を訪ねると、フライブルクでお世話になった前田成子さんから、フライブルクの地元紙に掲載された私たち視察団の記事が送

## Partnerschaft nicht nur auf dem Papier

„Bei unserem letzten Besuch ist uns aufgefallen, wie viele gemeinsamen Themen wir haben“, sagt Familienbürgermeisterin **Gerda Stuchlik** anlässlich des Besuchs aus der japanischen Partnerstadt Matsuyama. Neun Delegierte besuchten drei Tage lang Freiburg, mit Besuch der Ökostation und der Turnerschaft. Zum offiziellen Empfang waren 50 Freiburger in die Gerichtslaube gekommen, um zunächst entsprechend japanischer Sitte Visitenkarten zu tauschen. In ihrer Rede erinnerte Gerda Stuchlik an ihren eigenen Besuch in der Partnerstadt und betonte die Gemeinsamkeiten der Städte, wie die Wohnungsknappheit. „Ich freue mich, dass unsere Städtepartnerschaft nicht nur auf dem Papier besteht, sondern ein lebendiger Austausch ist“, so Stuchlik. Als sie das



Die Delegation aus Matsuyama mit **Chiro Tasaka** (Mitte, mit Buch) und **Gerda Stuchlik** (links daneben) in der Gerichtslaube. FOTO: THOMAS KUNZ

Thema Neubau des Fußballstadions anspricht geht das Geraune unter den Freiburgern los. „Sie sehen, auch Fußball ist bei uns ein großes Thema“, scherzte sie. „Guten Abend, ich freue mich, dass sie uns heute eingeladen haben“, grüßte **Chiro Tasaka**, der Vorsitzende des Gemeinderats von Matsuyama, auf

Deutsch. Auf Japanisch erklärte er weiter, dass er Deutsch zwar zwei Jahre gelernt, aber leider fast alles wieder vergessen habe. Bei einem gemütlichen Beisammensein nach dem offiziellen Teil zeigt sich, was die Freiburger und Besucher aus Matsuyama verbindet: Die Liebe zum badischen Wein.

(フライブルク地元新聞「バーデン新聞」の1月24日掲載記事)

られていた。

ゲルダ・シュトフリック副市長を中心に団員全員が映っている大きな写真には、「パートナーシップは形だけのものではない」というタイトルと共に、22日に開催していただいたフライブルク市民との交流会の様子が詳細に記載されていた。

その内容は、シュトフリック副市長から「私たちのパートナーシップが決して紙の上だけに存在しているのではなく、交流が活発に行われていることを非常にうれしく思っております。」とスピーチされたこと。

また、私が挨拶の中で触れた、昭和63年の姉妹都市提携時の思い出を語ったことには触れず、たどたどしい冒頭でのドイツ語の挨拶や大学2年間で習ったドイツ語をすっかり忘れてしまったことなどがジョークとして記事に掲載されていた。

私たちの訪問をこうして地元新聞が取り上げていただいたことに大変感謝するとともに、多くのフライブルク市民の目に触れることで、両市の友好親善の促進につながればと思ったところである。

姉妹都市提携26年の中、多くの方々の地道な努力によって着実に成果が上がっていることに感謝するとともに、これからのフライブルク・松山両市の交流が一層深まり、更なる発展を遂げることを祈念したい。

最後に今回の視察が円滑に進み、かつ、限られた時間の中で活発な論議ができたのも、それぞれの視察先の皆様のおかげであり、派遣団を代表して敬意を表するとともに、深く感謝申し上げる次第である。

今後の議会活動の中で、参加した各団員が、この視察で得た知識を十二分に活用し、市民福祉のさらなる向上につなげていくことを確信しつつ、団長としての視察の総括とする。